2年目のエチオピア暫定政権

復興に影落とす難民問題

三十年にわたる内戦が終わったエチオピアに暫定政権が発足してから一年余が過ぎた。内戦の傷痕に三年前からのかんばつが追い打ちをかけているものの、メンギスツ前政権の追放に中心的な役割を果たした反政府ゲリラの拠点、北部のティグレ州では、地道な再建の努力が始まっていた。一方、南部のシダモ州では、隣国ソマリアの内戦を逃れてくる難民が急増。飢餓が深刻化しており、復興の行方に影を落としている。国連児童基金（ユニセフ）の親善大使として、エチオピアを訪問した黒柳徹子さんに同行、現地を見た。

「緑の学校」で熱心に学ぶ子どもたち＝メケレ近郊で、ユニセフの善良世さん写す

親善大使・黒柳徹子さんに同行

特派員報告

村上 伸一

ドロオド（エチオピア・シダモ州）

●及ばぬ援助

ソマリア、ケニア両国との境に接するシダモ州の町ドロオドで、難民キャンプに広さ二㍍ほどの粗末な小屋が密集していた。周辺の土地はかんばつの影響で土ぼこりが、時折、砂あらしが舞い上がるだけ。エサがなくなり、餓死したロバの死骸（しがい）が散乱する。キャンプの内部には、土を盛っただけの人間の墓が目とともに増えている。

一年半前に三千五百人だった町の人口は二千人。十五歳以下の子どもが半数を占める。ソマリアからの難民のほか、以前エチオピアの内戦を逃れてソマリアに避難し、戻ってきた帰還民もいる。

難民キャンプから十㌔ほど南を流れる幅数百㍍のガナレ川を、小舟に乗って、毎日百五十人以上が逃げ込んでくる。大半の人々の所持金は乏しい二千ソマリア・シリング（一米ドル）にも満たない。我々が訪ねた時も、ハビバという名の四十歳の母親が、七人の子どもを連れて着のみ着のまま渡ってきた。母親はうろうろの栄養失調がたたって死んだ。食べ物がもらえるからここに来たと話した。

この難民キャンプでは、約一年前から非政府組織（NGO）の「国境なき医師団」（MSF）オランダ支部が救援活動を続けている。今年四月からは、エチオピア政府とも協力して本格的な食料援助も始まったが、道路事情が悪いため遠巻き国連が協力して本格的な食料援助も始まったが、道路事情が悪いため遠巻き国連軍の必要量の四分の一しか配給できない。

毎日150人超す流入

かんばつ・飢餓が深刻に

ソマリア国境

キャンプには四つの給食センターがある。その一つでは、母と皮ばかりになってしまった乳幼児を抱いた非常に多く、将来の興国の自活が危ぶまれる。

数カ月前までは、キャンプ全体で一日平均約四十人が死んでいた。今は半分以下に減ったが、死者は幼いほど多い。

難民のための診療所で「国境なき医師団」の診察を待つ親子＝ドロオドで、ユニセフの善良世さん写す

●緑の学校

ティグレ州は一九七五年以来、州の自治を目指すエリトリア人民解放戦線（TPLF）の拠点として、旧政府軍の攻撃を受けた。土地は荒れ放題となり、さらにかんばつも加わり、三十年前には半分以上が森林だった山々が、ほとんど地肌をむきだしにしている。

TPLF創立者の一人であるアラスト州知事は「森林破壊はまきや建築用に木を切ってきたせいもあるが、可燃ガスを作るための薪林をするために爆撃された影響のほうが大きい」とした上で、「平和を勝ち取った今こそ、人民が全力で国土再建に取り組む時だ」と意気込む。

州都メケレ郊外のメケボ山では、十年前から周辺住民が爆撃を合間を縫っては植林を続け、三百万本の苗木を植え終わった。また、旧政府軍の爆撃で州内に五百四十六あった小中学校の半数が破壊された。このため、大きな付録樹の下に子どもたちを集めて教育する「緑の学校」が各地に設置されていた。

エチオピアの難民一九一年の国連調査によると、エチオピアではかんばつと内戦による農業生産破壊、家畜喪失のために難村を余儀なくされた国内避難民が約八百万人。九〇年末以来、ソマリアの内戦を避けて難民キャンプに来た難民が約六十五万人、帰還民も約三十五万人に達する。

（村上伸一）